

武蔵野日曜集会

聖霊の愛―執り成しの霊―

――ローマ書第8章18～30節――

1996年6月23日(武蔵野)

小池辰雄

愛は一切に勝つ 恵福 イズムを超越しろ 偉大なる詩人よ、出でよ 無者Ⅱ無限無量者 楽
音 テレビで一席 愛の霊 一緒にキリストの中に入りましょう 圧倒的な愛

【ロマ8・18～39】

18 われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。 19 それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。 20 造られたるものの虚無に服せしは、己が願いによるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。 21 然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光榮の自由に入る望みは存れり。 22 我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。 23 然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。 24 我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争でなお望まんや。 25 我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

26 斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。 27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えはなり。 28 神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。 29 神は予じめ知りたもう者を御子の像に象らせんと予め定め給えり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子たらせんが為なり。 30 又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光榮を得させ給う。

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。 32 己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。 33 誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。 34 誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。 35 我等をキ



リストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、
あやうき危険か、つるぎ剣か。³⁶ 録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊
の如きものと為られたり』とあるが如し。³⁷ 然れど凡てこれらの事の中にあ
りても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。³⁸ われ確く信ず、死
も生命も、御使も、みづかい權威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、
³⁹ 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスに
ある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

●愛は一切に勝つ

私は90歳を過ぎたら忘れっぽくなってしまうてね、トンチンカンで困るんですが。今日はローマ書8章18節から30節まで、『聖霊の愛』という題でお話します。

「アモール・オムニア・ヴィンキツト」(愛は一切に勝つ)

という。いろいろな意味で、愛ほど力強いものはない。愛は弱いかと思つたら、冗談じゃない、一番力がある。それは神・キリストの愛です。これは一番力がある。この言葉は、ドイツ系スイス人のカール・ヒルティーの言葉です。私は旧制高等学校の学生のときに、このヒルティーのものはドイツ語で非常に親しんで読みました。ヒルティーを初めて日本に紹介した人は、東大の哲学の教授のケーベル博士です。けれども、ヒルティーは聖書の人であるということは当時の大学生はほとんど知らない。また、聞いても、聖書をあまり読まないから、興味も持たない。

「ああ、キリスト教か」

なんて言つて別扱いにして、本当にそれに親しもうとしない。

私は「キリスト教」という言い方は嫌いなので、申し上げている通り、キリスト道です。教というと、頭でもって覚えたりなんかしようとする。道は自分の足で歩かなければならない。生活でもってそれを自分の身につけなければならぬ。だから、私は道と言う。弓道、柔道、剣道、茶道というでしょ。みんなこれは道なんです。道というのは本当に素晴らしい言葉です。キリストは「我は教えなり」とは仰らなかつた。「我は道なり」と言われた。

「我は道なり、生命なり、真理なり」

と、これはキリストの素晴らしい言葉です。神さまの道、神道です。福音は道音、といつてもいい。「福音」なんていうのはあまりいい言葉ではないね。

● 惠福

ヒルティ―が『グルユツク』という本を書いた。これは日本語で『幸福論』と訳してあるが、いわゆるこの世の幸福とか、しあわせではない。天的なものです。ルターが「いわゆる幸福を望むことは間違いだ。幸福をめやすにしてはだめだ」



と言っている。神と本当に一つになれば、それが天的な幸福である。結果が幸福なんです。求めるものは幸福ではない。そういう天的な幸いです。むしろ、恵福なんだ。恵みのさいわいです。

「さいわいなるかな、霊の貧しき者」

という、あの「さいわい」という字は「マカリオイ」という字ですが、「恵福」と訳さなければだめです。天の恵みのさいわいです。

詩篇23篇は詩篇の代表的なものです。

「わが世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫とわれにそいきたらん。我はとこ

しえにエホバの宮にすまん。」(詩篇23・6)

この「恩恵」とは神さまの恵福です。「我はとこしえにエホバの宮にすまん」とは実は

「我はとこしえにエホバの宮である」

ということです。パウロが

「汝らは神の宮である」

と言いました。この旧約の言葉はむしろ新約の恵みの世界からいうと、私たちは神の宮、キリストの宮、活ける宮なんです。我々は「活ける宮」である。黙示録の終りの方に似たような言葉があった。

「愛は一切に勝つ」(アモール・オムニア・ヴィンキット)

とは素晴らしい言葉です。これはヒルティーの墓碑銘です。「勝つ」ということは相手を倒すことではない。相手を自分の中に入れてしまう。それが本当の勝利です。

「敵をも愛せよ」

と言ったキリストのあの愛です。敵もまた敵でなくなってしまう、味方になってしまう。

「昨日の敵は今日の友」

という言葉がありますね、そういうように、愛は一切を自分の中に入れてしまう。戦いは敵を倒しますが、そんなものではない。

「四海はすべて自分のはらからと思うのに、どうしてこんなに争うか」

とは明治天皇の言葉です。なぜ、こんなに喧嘩するかと。明治大帝はなかなか偉い方だったね、あれは聖書を読んだんですよ。愛は一切を包摂してしまう、自分の中にとり入れてしまう。

●イズムを超越しろ

それでは、ローマ書8章の後半に入ります。

18 われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。

この苦難は、やがて栄光の時がくる、それには比べものにならない。



「苦難を通して歓喜へ」(ドウルツヒ・ライデン・フロイデ)

ということ。これはベートーヴェンの好きな言葉です。第九シンフォニーは正にこの境地をもって、最後にシラーの『歓び』(フロイデ)という詩を引用したでしょ。交響楽に歌をおわりに入れたのは特別なんです。

19世紀の政治家のリンカーンやグラッドストーンの伝記を読むと、彼らは本当に聖書をよく読んだ信仰のあつい人たちです。今の日本の政治家にそんなのがいるかね。

「政治は神の下においてだ」

とはリンカーンの言葉です。そういう敬虔^{けいけん}な、うやうやしい気持ちが非常に薄くなってしまう。西郷南洲が

「敬天愛人」

と言った、その「敬天」がなくなってしまった。敬天のないところに本当の「愛人」はなんでしょう。今の民主主義なんていうものはだめだ。本当の真理というものは「主義」なんていうものでは表せるものではない。「イズム」ではない。

「イズムを乗り越えなくてはいかん」

とはゲーテが言った言葉です。

「イズムでものを言っているうちはだめだ。イズムを超越しろ。何々主義ではない」

と。民主主義の上に神さまがいなくてはしょうがないよ、宇宙の偉大なる絶大なる神を全然そっちのけにした民主主義なんていうものはね。

こないだ、東大の私の担任の学生たちの還暦の祝いの会があつて、私は招かれた。その時にもはつきり言つてやった。偉大なる宗教の世界をもたなければだめだということ。それは仏道でもキリスト道でもいいが、しかし、キリスト道は世界の宗教だ。「宗教」という言葉自身がなにかそぐわないけれども。霊の道、霊道^{れいどう}なんだ。教えではないんだ。

●偉大なる詩人よ、出でよ

これは私が自分で言つたらおかしいけれども、武蔵野幕屋で語られたところの天来の真理は、そこから簡単に聞かれる真理ではない。人間小池が語っているのではない。そういう気持ちで、皆さんも、この集会を神・キリストのものとして非常に、平伏しかつまた自信をもってください。いずれ私は詩の形でもって表現します。

私は中学の英語の時間から非常に詩が好きになった。生まれつきそういう性格なんでしょうけれども。ロングフェローの詩だとか、テニソンの詩だとか、後でミルトン、ホイットリア、それから大学に来てからはダンテ、ゲーテなどを讀んだ。ダンテというのは凄い。私はダンテは世界最大の詩人だと思つてゐる。「地獄・煉獄・天国」を書いたダンテの『神曲』はぜひ、訳で結構ですから、お読みになつてください。大変な詩です。あれに匹敵する詩はちよつとない。イタリヤはダンテをもっていることの故に、イタリヤの価値ありというぐらいだ。



ドイツはゲーテです。フランスはユゴーかな。ロシヤはトルストイ、ドストエフスキーか。とにかく、超一流の詩人をもっている。日本ではそれだけの詩人がまだ出ないね。夏目漱石さんではだめだな。押しが足りない。徳富蘆花もちょっとだめだ。蘆花はあるところまで来たんだけど。内村鑑三先生がそのことを嘆いて、

「偉大なる詩人よ、出でよ」

と言いました。内村先生というのはなかなか詩的な人で、藤井武先生もそうですけれども、両方ともいい魂だった。

私は水戸の高等学校から土曜・日曜に東京に帰ってくると、内村先生の手町の集会には必ず出かけていった。大学にきたら、藤井先生の家庭の集会に出かけた。非常に懐かしい。内村・藤井なんていうのは——いわゆる無教会だけれども——無教会なんていう枠の中にいる人ではない。藤井先生の『羔の婚姻』^{こひつじ}という素晴らしい詩がある。あれは未完成で終わって、あと2年くらい先生は生きていたら完成したでしょうけれども。

あなた方も苦難がなかったらだめなんです。地上でもってキリストのために、福音のために苦難をもっていなかったならば、ちよつと天国に行こうとしたって、その門でもって御使に、

「ちよつと待つてくれ！」

と言われてしまう。天国の入り口で「ちよつと待つて」と言われて、

「よし、お前は聖書のために、福音のために、キリストのためによく戦った。よろ

しい。お前は中へ入りなさい」

と言われなければだめです。ミルトンがそんなことを譬え^{たと}のようにして書いています。どうぞ、そういう福音の、霊音^{れいおん}のための戦いをしてください。また、それをやってないと、自分自身がだめなことが分かります。

●無者Ⅱ無限無量者

私は、申し上げているとおり、「無者」です。自分の信仰なんて、そんなものは問題にしてない。ただ、神・キリストの愛に——「愛は一切に勝つ」という——愛に圧倒^{ひれふ}されている。私はキリストの愛に圧倒されて、平伏^{ひれふ}して、そして本当の力をいただいて歩いています。皆さん一人一人が、それをはっきり言えなくてはいかん。自分の信仰なんて、そんなものは問題にしてない。何もありません。無だ、無者だ。そこに無限無量なものが入ってくる。無者Ⅱ無限無量者です。この無者Ⅱ無限無量者を証した人はイエス・キリスト自身です。

「我を見し者は父を見しなり」

と言えることができた。だから、あなた方は

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、これがはつきり言えなくてはいけない。どうですか、言えますか(笑)。我々は相対的



な人間だからね、躓いたり転んだりするよ。そんなことはどうでもいい。ただ、

「本質的には、私の生命の生命はキリストです。これははつきり言えます」

と、あなた方一人一人が言えると思うけれども。それでいいんです。それが本当のクリスチャンなんだ。どういふことをしたとか、何とかということではない。

「キリストを生きたか」

ということです。そうしたら、楽でしょうがないし、力が来てしょうがないですよ。楽で、力が来て、ありがたくてしょうがない。そういうし、うがない世界です。行き詰まらない。私は行き詰まることを知らない。無者＝無限無量だから。キリストがそうだったから。キリストが入っていらつしやるから、

「ありがとうございます」

と平伏して、キリストの生命をいただく、キリストと一つにされる。どこまでも受け身です。一つにされるから、力がくる、生命がくる。自分の信仰でも何でもない。

「どうも、私の信仰は本ものではない」

なんて、自分の信仰を考える必要はないですよ。

「あなたはクリスチャンですか？」

と聞かれたら、

「いえ、何ありません。私は何ものでもありません。ただキリストに圧倒されて
いるだけです」

と言ってやりなさい。絶対に、聞いたやつがびつくりするよ。それが武蔵野幕屋の一人びとりです。

こないだの京都特別集会でも、僕は言いたいことをだいぶ言った。そしたら、U君から便りがきて

「いやあ、先生はもの凄い。もう、参りました！」

と言ってきた。私がもの凄いのではない。キリストがもの凄いんだ。

私がいたから、みんな福音の世界に入ってきたんですよ。そういう道を神さまが拓いたんだから仕方がない。

「人間小池がどうだ」

なんて、そんなことではない。武蔵野幕屋は神さまのそういう源泉だからね、源の泉だから。あなた方一人ひとりはその泉の力ある水ですから。水であり火である。

●楽音

聖書ではよく水に例えたり、火にたとえたりする。

「我は火を投ぜんために来たれり」

とキリストが言われた。あれは聖霊です。聖霊はそういう火なんだ。あるいは、生命の水



なんだ。これは譬えだから仕方がない。

「主さま！」

と、はらわたの底から叫ぶ。ただ私は「主さま！」と言うだけが私の祈りなんです。「主さま」と言うのと、キリストの中に入ってしまう。本当は

「我れは汝を捨てないぞ」

と、キリストの方から先に声がかかってくる。あなた方一人ひとりがキリストから

「お前を捨てないぞ」

と呼ばれる。

「ありがとうございます」

と答える。そうすると、キリストの力が来る。

「自分が、信仰がどうだ、聖書をどれだけ勉強したか」

と、そんなことではないんだ。そういう簡単な消息がわかりますか。いいでしょ、楽しいでしょ。楽しいし、力がくるでしょ。そうすると、あなた方のやっていらつしやることに本当に力がくる。楽しくなる。なんでも、本ものは楽しいんです。何かやっていて、それが楽しくなかったら、まだ本ものでない。楽しい世界です。福音でなくて、^{うきうき}楽音なんだ。楽しみの音なんです。

●テレビで一席

私はテレビで一席やりたいくらいだね。

「聖書なんて、もったいぶっていません。聖書は私が書いた本です」

なんて言ったら、みんなびつくりするだろうね。

「あれは間違いではないか」

と。「聖書は私が書いた本です」と言いたいくらいに、聖書と一つになっている世界です。

聖書というのは一番楽しい本ですよ。聖書を読んでいると楽しくてしょうがないと、そうならなければ、本当は聖書を読んでいるのではない。普通、

「この所はどういう意味だ」

とか、「むずかしい」なんて言っているんだ。分からないところは、分からなくていいよ、そんな文句は。文句の奥の世界から神の根元語が響いてくるから。

ベートーヴェンは終りの8年間はつんぼでした。8年間つんぼであるベートーヴェンは実は、小川の音でも森のささやきでも全部聞いている。彼は霊の耳で聞いている。だから、あんな素晴らしい作曲ができるんです。肉の耳で聞いている。私はドイツではベートーヴェンをその意味で非常に尊敬する。ベートーヴェンというのは凄いやつだ。ベートーヴェンとゲーテだ。

フランスのユゴーの『レ・ミゼラブル』というのは素晴らしい本だね。第一流の本を読



みなさいよ、もう二流以下は読む必要はない。第一流、超一流のものに、それだけに親しんでいけばいい。だいいち、聖書はそういう本だから。聖書というのは大変な本だよ。ルターは暗記するくらい聖書を読んだ。だから、彼がドイツ語に訳すときは楽だったんです。あれは2週間くらいで新約聖書を訳してしまったかな。

私はまだやりたいことがたくさんあって困ってしまうな。まあ、いいや。皆さんも、この福音のためには、キリストのためにはそれぞれなさりたいことがいろいろあるわけです。内容は何であつてもいい。

「なんだろう、あの人のやつていることは。ちよつと普通と違うな」

と、こういうことになる。それは聖書を生きていけば、当然そういうことになります。「聖書研究会」なんてだめだ。聖書は研究ではない。身体で読む本だから。

●愛の霊

ローマ書に戻ります。

18 われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。19 それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。20 造られたるものの虚無に服せしは、己が願いによるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。21 然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光榮の自由に入る望みは存れり。22 我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。

天国的なところにまだ入れない。

23 然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。

「御霊の初の実」とは御霊という初めの実です。まだ本当に子でない。いろいろ別な生まれつきのものが入っている。全存在が贖われることを待つという。これは、地上では全部贖われることはない。

24 我らは望によりて救われたり、

そういう全人的な救の望みによって救われた、望みにおいて救われているということ。望み「によって」救われたのではない。そういう望みを持つていながら救われた。

眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争でなお望まんや。25 我等

もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

「もし」なんていう言い方をしているけれども、

「我らは見ぬところを望んでいるから、忍耐をもつて待とう」

と、そういうように内容的には読まなくてだめです。パウロはこんな仮定的なものの言い方をしているけれども。



26 斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。

「御霊」というけれども、これは日本語だから「みたま」と訳せるけれども、もちろんこれはただ「霊」という言葉です。聖霊は弱きを助けたもう。

我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆き（呻き）をもて執成し給う。

「嘆き」ではなく、これは呻きです。

27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りましたもう。

「御霊の念」というのはいい言葉ですね。

御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えばなり。

その通り。聖霊は執り成してくださる。だから、聖霊というけれども、これは愛の霊、愛、霊なんだ。人を助けようとするのが愛だから。人を助けるのが愛です。あなた方、愛と言ったら、具体的に人を助けなければ愛ではない。具体性をもたなかったらだめです。おなか为空いていたら一緒にパンを食べるとか、喉が渴いていたら冷たいものを飲ませてあげるとか、それが本当の愛です。「私はあなたを愛している」なんて言って何もしなかったら、ひとつもだめです。そんな感情ではないんだ、具体的なんだ。

28 神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと

相働きて益となるを我らは知る。

「すなわち御旨によりて召されたる者」とは大事な言葉だ。召されなければ、「神を愛する」なんてことはいえない。人間が神を愛するなんてことは本来できないんです。

「主、われを愛す」

でね、キリストに愛される。

「私は躓いても転んでも、キリストは私を捨てません」

と。それがキリストの愛です。人はすぐ相手の在り方でもって、愛したり憎んだりそつちのけにしたりする。ところが、キリストの愛というのはこちらの在り方なんかとは関係がない。だから、その愛に圧倒される。救の愛なんだ。キリストの愛とキリストの救は同じことです。だから、ありがたくてしょうがないから平伏す。平伏すと、はつきりと立たせてくださる。そして、福音のために、真理のために仕事をさせる。仕事の内容は一人ひとりみなそれぞれです。

●一緒にキリストの中に入りましょう

日曜日というのは、私の話を聞くためにあなた方はいらっしゃったのではない。一緒にキリストの世界に入るためです。

「先生は同じようなことを言っているから、今日はよそう」

なんて、そんなのはだめなんだ（笑）。



「一緒にキリストの中に入りましょう。それは楽しくてしょうがないから。力が来てしょうがない」

ということでなければ。我々は日曜日に原動力をキリストから得て、あとの6日間を、その原動力を種にして、根っこにして進んでいく。日曜になったらだめになっていた、なんていうのではないよ、いよいよ力が作用するのでなくては。それであれば、日曜を本当に受けとっていることにならない。「そうですか」ではないよ、「そうです！」だろ。あなたの方の答は、

「そうです！ 正にそのとおりです」

でなくては。聞かなくてもわかつている。

²⁸神を愛する者、すなわち御旨^{みむね}によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。

「益となる」ではなく、「善となる」です。プラスとなることです。

²⁹神は予じめ知りたもう者を御子の像^{かたち}に象らせんと予め定め給えり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子^{ちやくし}たらせんが為なり。

これは素晴らしいね。神のかたち、キリストのかたちに我々はそれぞれの姿をもって——平等にするのではない——いよいよキリストらしくなる。

神さまは大芸術家なんです。決して同じものをつくらない。あなた方、一人びとりは天下、一品です。人真似する必要はない。もし人真似したら、それは神さまの創造をけなすことになる。A君はどこまでもA君らしくていいんだ。らしきというのは面白い言葉だね。世界に他に一人も同じ人はいない。A君と同じ人は、世界中何億人いようが、いない。そういう、神さまは驚くべき創造者です、大芸術家なんだ。同じものを一つも造らない。みんな特殊的、例外的存在です。人間の目にいくら似ていても、本当は違うんだ。

³⁰又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義したる者には光栄を得させ給う。

³¹然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。

「神もし我らの味方ならば」と、仮定的な言い方をしているけれども、

「神は我らの味方であるから」

ということ。神さまが味方だから敵はいない、天下無敵だということです。

³²己の御子を惜まずして我ら衆^{すべて}のために付し給いし者は、などか之にぞえて万物を我らに賜わざらんや。

「衆^{すべて}」という言い方はよくない。「一人びとりのために」ということです。これは十把ひとかげではない。パウロさんは、これは言い方が悪いね。パウロさんに抗議してやる。

「己の御子を惜まずして我ら一人びとりのために付し給いし者は、などか之に



「そえて万物を我らに賜わざらんや」

ということですよ。これは素晴らしいね。宇宙は一人びとりのためなんです。「太平洋は私の池です」なんて言ったらいい。

私は伊豆に山小屋をもっていますけれども、そこから太平洋を眺める。素晴らしいね、太平洋というのは。太平洋のはてから太陽が上がってくる。何でもない現象だけれども、その何でもない現象に素晴らしく感動する。あなた方も山に登って山でお天道さんの上がってくるのを見たら感動するでしょ。「お天道」とは面白い言葉だ、天の道と書くんだね。

● 執り成しの霊

³³ 誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。

いいねえ、この言葉は。あなた方一人びとりは選びの器だから、誰も何ともすることができない。「神は之を義とし給う」とある。「義とする」という言葉がよく旧約から出てます。神の御意が体现されているところが「義」なんです。この「義」という言葉はただ「正しい」という意味ではない。御意が行われるところが義です。聖意、体现です。簡単にいえば、「神は之をよしとしたもう。結構だ」ということです。

³⁴ 誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。

「神の右」という言い方をするのは面白い。天界に右も左もなさそうだけれども。まあ、これは表現だから仕方がない。「左」とはいわない、「右」という。ぎつちよの人は「左」と言いたいかもしれない(笑)。まあ、いいよ、どっちでも。

「我らの為に執成し給うなり」

という。この「執り成す」ことが大事です。聖霊は執り成しの霊なんです。執り成しの霊、助けの霊です。パウロが別なところで「助けの霊」と言っています。

とにかく、パウロの手紙は素晴らしい。

「ローマ書は金の指輪で、ローマ書8章は指輪のダイヤモンドである」

とは内村先生の言った言葉です。

³⁵ 我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。³⁶ 録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。

面白い言い方だね。キリストの為にはそういったように悩み苦しむ。

³⁷ 然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。

どっこい、負けてはいません。パウロは実際にそういう戦いをした人だから、こういう



ことがはつきり言えるんです。

³⁸われ確^{かた}く信ず、死も生命も、御使^{みつかい}も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。これは素晴らしい言葉だね、凄いところだ。これはローマ書8章の結論だね。

●圧倒的な愛

これが、パウロはまだローマに行ったことはないけれども、ローマの人たちへ書いた手紙なんです。パウロはローマでもって殉道の死を遂げる。こういうローマ書なんていうのが残っているのはありがたいことです。こういうのが残っているということは不思議なことです。9章からも更に展開してずいぶん書いてある。なにしろこれが16章まであるんだからね。これは正直、簡単には読めない。本当に降参するよ。

どうぞ、皆さんも、信仰なんて問題にしないでください。いわゆる相対的に

「あなたは信仰はどうですか？」

なんていう問には、

「私は信仰なんか全然ありません。自分の信仰なんか考えません。ただキリストの力ある愛に圧倒されて生きているだけです」

と、そういうふうに答えればいい。それが本当の答です。これは圧倒的な愛だから、力が来てしょうがない、ありがたてくしょうがない。こっち側の信仰がどうだこうだ、行為がどうだこうだと、そんなことではない。そうすると、もの凄い力が来るから、何かせざるを得ない。今までできないと思っていたことができてしまう。その人は本当にいろいろなことができる。そういう不思議な世界です。私はそういうように、もう簡単なんだ。それでないと、本当の力がこないから仕方がない。

